

農家益

地

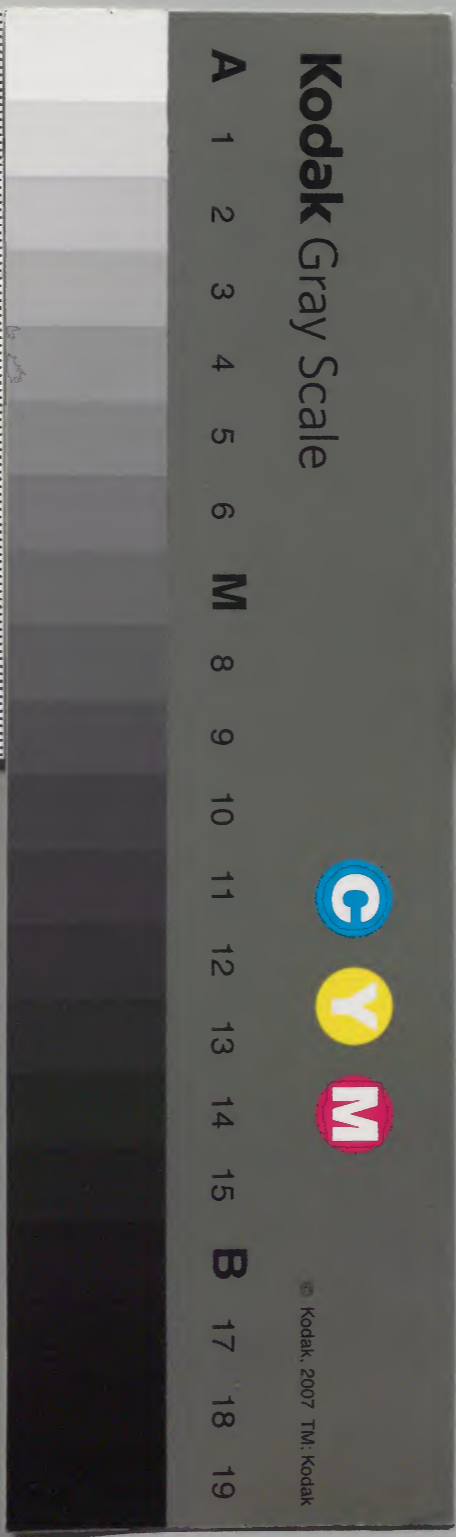
農商務省  
和圖書  
第一四七號  
共三冊

和書門  
類號  
三〇三六六  
一七六函  
五六架  
五冊

內閣文庫  
三〇  
八三函

內閣文庫	
番號	和 30366
冊數	5 ( 2 )
函號	183 237

陸生





農家益地之卷

樹總論

五畝に宅樹一桑とて以て世を立たしめ之を  
とほば衣とて下田の田は身を養ふがえ  
て八人の家乳けりては子孫の益あり

物米稼とてけりては子孫の益あり  
本とて栽りて用と十年の後とて十年計  
と益ありては子孫の益あり



農家益地之卷



うりしりしりしり初く栽定てこれのたから益し  
 かりし美あがて丘後曠野を力ゆかて僅の  
 織屋の庭初植てと友日簾とかいふ所これに  
 縁法風とて秋と清あま定て紅系  
 丸と実子たがら益と見く後落葉とゆふ人客  
 明けけしとを漸二月れをよ実と出し実系  
 等しくそ利とゆふとかなよとて述が  
 しく松樹のどく伐て再植せぬのと差ひて

伐て接樹し実子毎さ柄と生どりの強有て用を  
 ねん半菓樹小勝るも大らて催り栽ごらんや  
 何この地より生育せけらんや寺樹果木より  
 実よ天の場とゆふ  
 橋の本実子植て  
 美彼者より十日より極れ種と白くを極ゆるひ  
 して五し肉とをて実子をとり桶よ色水に浸  
 しておけむけ果とてとてぬ出し菌とて唾

九一 受手園書



（廿二）學考原庫

試よがし細くふたりて種子の口を因くころ  
飢よ揚水とまし先乾土の上畠に小土と  
たし焚れ焼灰を小便とけきく乾し

苗床圖



右の如く作れ

- けいこるの畠代用
- 四方大垣とと
- 小土をよく揃
- 海いして土とく

右圖れ如く作れとて  
よの覆の菜とて餘九六寸にかの覆本の菜と  
芽に掛ぬ中よ小使とて水とぬるを  
そよ芽よとて本株を五六月より先  
是合くたし妙よ肥とてとて却ら本は  
と成をを用

種子撫く每

種子よいろく匠あり丸実安苗猪乃丸

（廿三）學考原庫







中れた糸をちぎって蠟肉とくまう又肥した  
 実を粒にえいねを皮の細く作るととる先角  
 粒大よた糸の山に標をべし木を思ふうん  
 臥指年月うふに接し枝さう房大うて盛なり  
 本は房と実と粒と皮見合栽下

苗生立初年之圖



雄本雌本見分枝の女

苗成れ肉をそく延がるを男本多しむ苗乃  
 葉先葉の裏表より白赤と先有るる本の  
 白肌から色男本の要本と知れべしは本望の  
 の肉より引いて細よき尺ふす試みかしちとあけ  
 五の月よ栽替て二年月之年月れ去より葉の  
 て接本の着ふよ女栽とべし女ふは延方たし男  
 本はをひよふ試すとゆくと延る葉と思く



男木樹容  
葉付之圖



わくく程をたてて  
をくうりえしが竹とま  
男木女木よりわけて

女木一葉付之圖

女木樹容  
葉付之圖



女木一葉付之圖



勞よくしうしうとく長くを養く本を採よ  
 等て本肌を洗斑して芽生えしむる事  
 女小しうとくふくは是も利知し同式天かど漆  
 押れ植えしむる今く肥培しうしうは立たし  
 一蜜柑の葉すこし椎れ葉のこく青葉を養育  
 ものこれ極とておどしう候ま生れ物有一概よ  
 りごりりし  
 一男小と梅延よして根に半房れおれ能根有

寸と寸に年月よくふ候たぐし花のはなく  
 大さく長く刻く見まは黄多にして用事な  
 菜後のくふれし  
 一種子ぬらししを見分るは初水浸しよ  
 凡之十余日せしむく半宿しれしり内れ天  
 にを付るべし一危角とて出らる男本  
 おそれと女小かつしおどし  
 我内し此須務を裁ゆふ此見分なく樹の



好悪れ差別なきをいふは勝とては  
 少を裁りて其量の費のほどを以て之を  
 之所に比ばより計程を定む計下を以て  
 敷然しなり申候や皮衣履煉より其用乃  
 考とかなし申候か分るはたうこれをも  
 利の便うん申のほど致しり要具の然也  
 されば後太りて歴々方の沙勝より直に  
 程れとのまじば申候し裁法は下

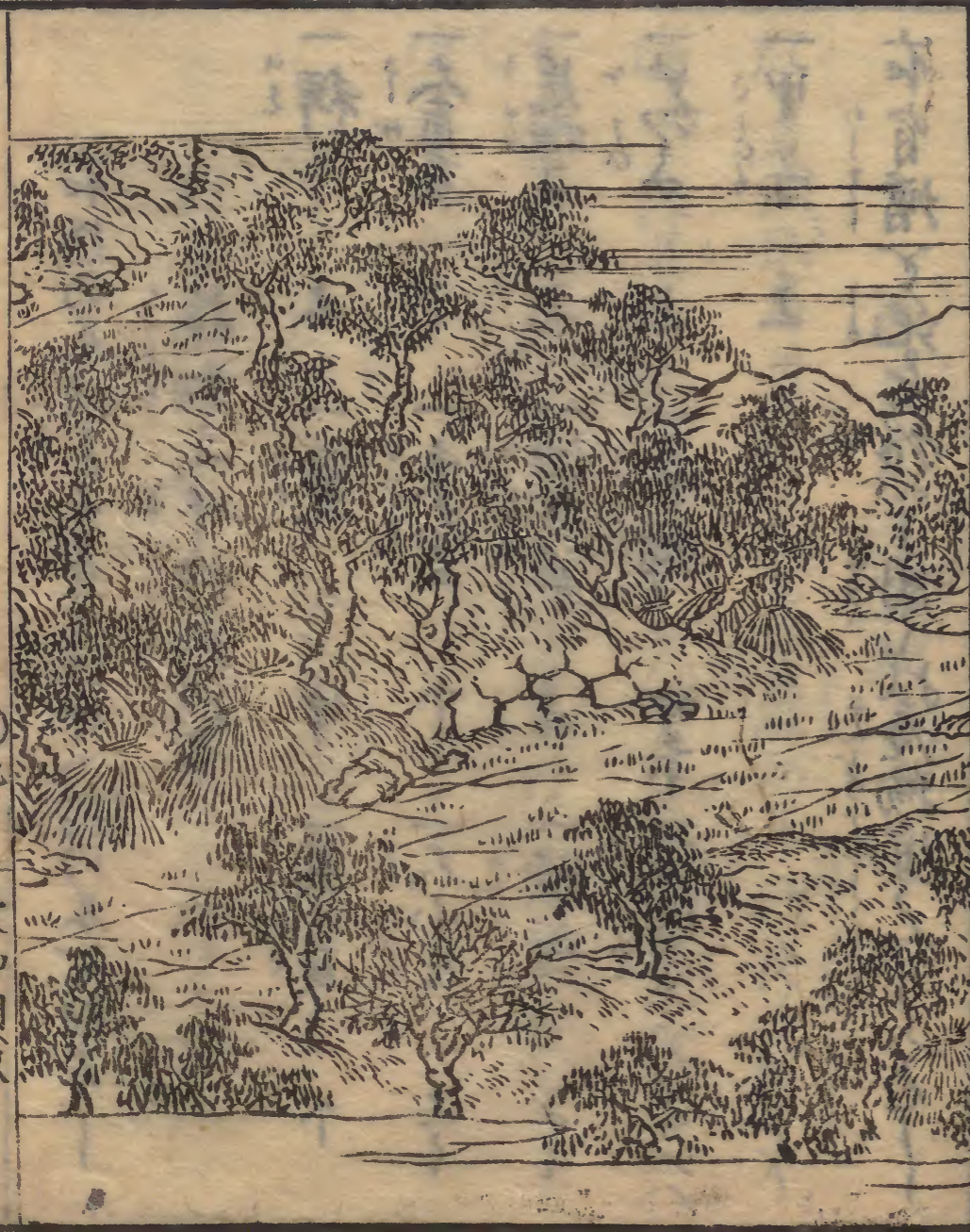
裁法比見く五并裁法と申

- 一 溪地いりち 一 瓜落うり 一 真土まんど
- 一 河所かほ 一 実入中まひらちゆう 一 馬砂うま
- 一 山附やまづき の 畠はたけ の 岩いし 上うへ に 植う て 下した へ 岩いし 下した
- 一 野の 地ち を 芝しば と 草くさ 塚づか と して 裁う ぐ 一 木き の 根ね と 床とこ
- 凍こ く 塚づか を 子こ ろ ころ ぬ ぬ を 多おほ く 入い る の 如ごと く 比ひ べ 列り
- と 一 二いちに 三さん 四し 五ご 六ろく 七しち 八はち 九く 十じゅう 後のち 枝えだ 多おほ 方かた を 少すく 向むか へ て 裁う ぐ
- 一 風かぜ 吹ふ 通とほ じ 来き よ 一 山やま 落おち ち 一









地  
和  
園  
藏



地  
和  
園  
藏









留

留

肥培禁好く

肥しれどしん所と唯根際と淋し七堀利げ州  
 まさこの葉屑をかきとをわし入並てうたぐら  
 かりげたりとらととらうらうら候肥し志る  
 ぞけい木は盛長とらうら一実のけりこも運  
 ひそえげり幹根と漆多根志を淋し七切く  
 こまへん中と入つかり畑を被巻より土用  
 中よ肥培とどし一後ハ肥しよ及ぶん年中に云



を皮りてよく十堆本の性不温ひ去痰生くも水  
と考肥えんご一とらりかつ

一堤の洪水れ思きを添よけりて本の根と行  
半能の根こめれぬ糸指れぬ物と行りて根本の根

よ打込うらあめりてと定むる滴て引扱ひきて穴よ油糟あぶらをす

竊かりても女にし入去と度ひ葉下おほの根ねりてか

一人ひと糞くそ一ひと糞くそ一ひと子こ竊か一ひと芥カイ焼灰やき

一油糟あぶら一ひと米糠こめ一ひと葉は一ひと叶は

一溝こう泥どろ去い一小ひと芝シ無む

一溝こう泥どろ去い一小ひと芝シ無む

右いげとも肥えんごによむ根ねを並ならべしと本根もと根ねと

おし除のぞて埋うめむられ大小おほよりち多おほし是こ合あひひ

一ひと中ちゆうのの肥えんご一ひとままくく種たねののここかりかり成なりなり

ををかかよよ式しき百ひゃく行ぎやうああののひひのの百ひゃく行ぎやうせせるるあありりここれれの

地ち厚あつくく去い味あじよくよくこころろここううりり改かめめよよ肥えんごししぬぬれれぬぬ物もの

とと下した一ひと會かい歎たん集しゆ群ぐんるる各おの自づか然ぜんとと肥えんごしし有ありりてて水みづ

根ねとと打うわわけけててもも地ち味あじよくよく一ひとままくく種たねののここかりかり成なりなり





和歌山縣



和歌山縣



葉虫 蟻と去る毎

葉虫ハ七月の頃葉を食ふこと迄捨て本を食  
入らざり小虫はこれと捕らて又ハ枝折て去り  
一松明よ火と灯し本根本よ去りてくをば使さ  
火の側よ花葉のこま支と川の松明を焼くもは  
一蟻ハ本よ中りて牙と喰ふなり是と云ふは  
冬青胎よ汁を焚て葉葉よぬりて本の根より  
かへ上に引まといをた一日救済く乾くばま

少幼を去りて五六年目より大本ハ左枝の  
しへは幼他より又たふれ茎とあり滑り出汁  
根よ去るもよう海邊ハ藤と根よまといて

接穂 ぬれく毎

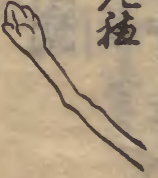
一長波岩より十一年め冬十は五年目れは分能  
葉一実のりよ本れ南よりたる枝をて取る  
波岩中の方と撰りぬれくは水の上げれ枝をて丸  
老本れ枝よりぬれをて去る速く

地誌一巻四巻





木のほたけ種



びるんの  
ほたけ  
ほたけ



春  
桜種  
図  
たて木

春  
桜種  
たて木





まのほろが  
実をのみ  
ほくご

まのほろが  
実の図  
櫻穂可丸大木

水十六 受水園



初日の接ぎ

取穂寸法

大木のほた 子木のほた  
あまのほた 子木のほた

ついでとく小桶の水と入とほけく接本場かび

接旬と女

表波者より土用と

土用末より年のはらより  
こで接し波者より接旬と  
ての接旬と女

夏土用中

接旬と女  
接旬と女

秋土用 かんたけ  
接旬と女

接人へ者長十九才より二十才まで

接ましく利淡

者と接と接と一年齢たての接旬と女

一接は日酒と接と接は接旬と女

これに接旬と女

い中に酒と女



基樹粉杖と廻積

幹の本肌と漆皮

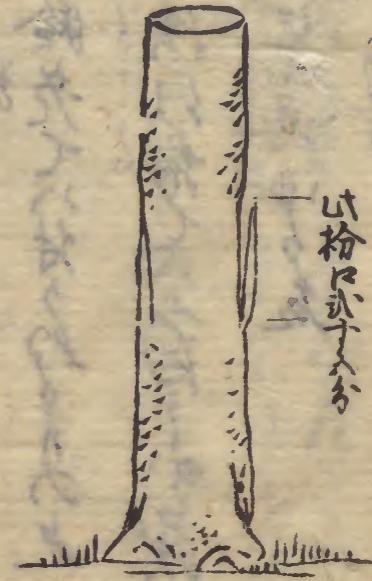
その方を小刀で

剥す又は分かつ粉之

小木橋植之す法

いざしく緩うつたるが橋舟之

板長サとすこふ板

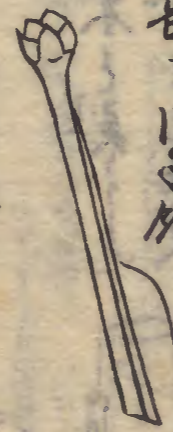


い粉に或すこふ

本に或れどろくと板を切る  
 けりうり或すこふ切らら乃  
 うして肉付す七小刀を  
 粉さ皮と云てもとくは小刀  
 底木を粉らばよ炭以て

大木接植之す法

板長サとすこふ



粉らとす

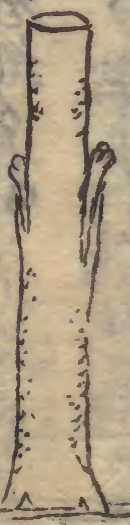
小木の橋植よりさす

小刀と云



又の長サ一寸五分あり  
 清みしを漆を以て用

小木をさすよ橋たる也



和名 橋口 園 蔵



同葉して巻たる

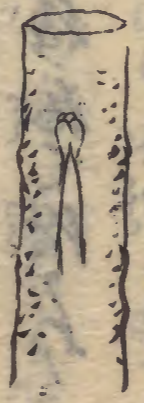
入低くはたして葉のうら  
かどと培りもよ  
迎ふよまをうけ

大木に實生おれり  
切て挿ぐ處木の

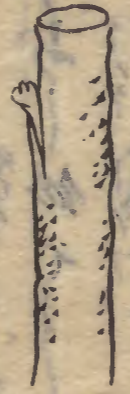


渚木とまうし  
林はくち物使  
切には挿ぐ

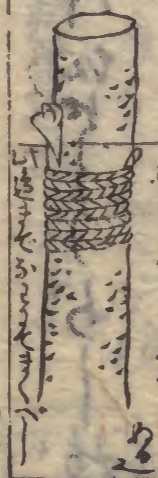
大木挿植真向



同横



同繩して巻る



同柱を挿る



圖の如く繩を巻柱と合ふ  
よを添すうはまを  
これいほよの本も挿木に  
樹液と吸て挿植を挿ぐ  
大木の繩を  
小木の繩を  
挿木の  
挿木の







一 養木此切に造りて出く芽と出くもの之悉飲  
 捨て併接植の上に出く芽と出くもの之悉飲  
 此の養木の切に下り枯下り此是後七枯  
 留り用き七接防の淋たり 口傳  
 一 養接し七はくぬ木ハ甚去用中ニ接だ 口傳  
 一 接たる木ハ翌年実がらりの之を年一とせば  
 今々実と外に捨だ 口傳  
 一 養接し七はくぬ木ハ此の年実がらりの之を年一とせば  
 今々実と外に捨だ 口傳

丈と六尺に近び枝も茂く横に芽出  
 かり 養木此切に造りて出く芽と出くもの之悉飲  
 捨て併接植の上に出く芽と出くもの之悉飲

寄接く

実植の内男木此切に物ニ植て出たりと引  
 接植よせんとも母り小本れ傍よ栽し此元を  
 出して伐り接植樹の根と地定げあて斜に倒  
 九を七植とてせよかりて養木の根よ芽  
 枝ハ繩と下ニ編先下にかかりて下枝ハ下り



樹とて老木に接す

慶長  
八月

寄之接



此は法云のふ切か  
むい下れぬり切なり

地廿二受和園

老木と切て改木のて接留し月後切は

一は芽接はは五才て洞室かりて有傍を

池に作りて悉くきき小述がこ

一松山の實と接せんと思ひ新小坂の本とは五

場所まていし木を作りて左松山の苗を求て裁

向互接は分よ植を以年五位の取り得甲木の

之年月迄成て傍に松を栽し不松ら枝と接五

年む初を方苗を求る半たはかとも後





池田四ノ宮園蔵



池田三ノ宮園蔵







世下... 口... 園...

皴しほのよりて白粉びやくこなの並なみたるハ痛熱いたつねつなり

又房ふされ小豆こまめ拵ぢうを以もつ実みととぶ旬しゆんと知しる也なり

十月じゆつれを霜しも月げつに入いれて取とるを惡わるし必かならず月つき減へす

一ひと枝えだ折をりにさぐり候まは本もとれ痛いたみなり

一ひと実みれ志し申まをしたるハ取とり目めに于おに及およぶ候まは未ま五ご旬しゆん

一ひと申まをしたるハ于おに及およぶ候まは未ま五ご旬しゆん

一ひと白粉びやくこな吹ふく直な返へ下くだり也なり

揉もみけれ菜さい

雨あめの後のちすこハ露つゆ乾かわるべ内うち実みと丸まるとばうは灰はい

揉もみけれと七しち條ぢょう瘰れい癧ぢの粒つぶなり生なまれ糶せうと食たへては

又また糶せう節せつと実みと洗あへても合あへてもよ

一ひと紫むらさ菰こ 陳ちん皮ひ 香かう附ふ子し

右みぎ之の味あじ尚なほ分ぶんにて拵ぢうをせんと用もちひてよ

一ひと薄うす皮かわと糶せうと洗あへてもよ

一ひと生なま蕎そば麦あへの葉はとのみみ十じゆりり付つてよ

一ひと粟あわの花はな蒸む焼やくよして胡こ麻まの油あぶらととれれ付つてよ

世下... 口... 園...



本草綱目 卷之六 藥部 附錄

一 大根のほろけと付てよ

一 概の皮と剥ト洗てよ

一 概細の中に今も此よ其よゆをかゝぬて入もよ

一 概細の中に今も此よ其よゆをかゝぬて入もよ

本は若葉より生実より半

一 概人を概本百本と月

概五本 貳百本より二百本と生

概五本 百本余

概五本 五本斤余

概五本 五本斤余

平均を万斤余

右者大俵と銘と書記と付たり概の接方約ら

ハツの法有然ども葉繁く却ら規りて左一を條を

峯りのこむ國所の水土比理よしめて一概の逆も

互がこゝ此を部の類ををり解してを而く

相意の理と考へゆらむ是人未幾の理とも後

本草綱目 卷之六 藥部 附錄







